

コロナウイルス文献情報とコメント(拡散自由)

2021年9月9日

妊婦に対する新型コロナワクチンの効果と副作用

【松崎雑感】

妊娠中、あるいは、妊娠予定の人々に新型コロナワクチンが悪影響をもたらさないかの調査です。結論は「大丈夫」のようです。流産が増えるなどの悪影響はなく、短期的な有害影響はなかったようです。数年後、数十年後の影響については推定できませんが、ワクチンを受けない人々が感染した場合、妊娠経過と感染者本人の重症化リスクは極めて大きいことを考えると、ワクチンを接種した方が、メリットがずっと大きいように思います。

妊婦に対する新型コロナワクチンの効果と副作用

Theiler RN (Mayo Clinic Department of Obstetrics and Gynecology, Division of Obstetrics), Wick M, Mehta R, Weaver AL, Virk A, Swift M. **Pregnancy and birth outcomes after SARS-CoV-2 vaccination in pregnancy.** **Am J Obstet Gynecol MFM.** 2021 Aug 20:100467. doi: 10.1016/j.ajogmf.2021.100467. Epub ahead of print. PMID: 34425297.

背景：妊娠中に新型コロナに感染した場合、妊娠経過に悪影響がもたらされ、早産が増える。

American College of Obstetricians Gynecologists (米国産婦人科医会 ACOG)、Society for Maternal-Fetal Medicine (米国妊娠医学会 SMFM)などの専門家組織は、妊婦に対するワクチン投与を推奨している。

しかしワクチン開発トライアルでは妊婦は除外されていたため、ワクチン接種の有効性と安全性データが不足している。

方法

ワクチン接種者の包括的データベースと妊娠出産に関するデータベースを結合して、妊娠経過とワクチン接種の影響に関するコホートを設定した。

妊婦の社会人口学的特徴と新型コロナワクチン接種の効果および影響との関連をAdverse Outcome Index(有害事象発生指数)などを用いて評価した。

結果

妊婦コホート2002名中、140名(7.0%)がワクチンを受けた。妊娠中212名(10.6%)が新型コロナに感染した。ワクチン接種時期は平均妊娠32週(13~40週)。

ワクチン接種は新型コロナ感染率を有意に低下させた(1.4% (2/140) 対 11.3% (210/1862), $P < 0.001$)。ワクチン接種後に新型コロナに感染した妊婦は見られなかった。

高年齢、高学歴、非喫煙、不妊治療による妊娠、妊娠回数の少ない妊婦でワクチン接種率が高かった。

妊婦死亡、胎児死亡、子宮破裂など重篤な妊娠帰結発生率にワクチン接種の有無による差は見られなかった(5.0% (7/140) vs. 4.9% (91/1862), P=0.95)。

血栓症、早産の発生率についても両者間の差は見られなかった。

結論

妊娠中ワクチンを接種された妊婦は、新型コロナウイルス感染が有意に少なかった。妊娠経過に対する悪影響は見られなかった。

このコホートでは妊娠後期にワクチン接種を受ける者が多かったため、これらの結果が妊娠期間全般に当てはまるとは断定できない。